

# この世を浄土に

—— 脱原発への提言 ——

影山 教 俊

## ○はじめに言葉としての提言から

脱原発は信仰心（立正安国の精神）を養うことから始まる。「脱原発」のメッセージやスローガンを何百回、何千回、何万回と発信し続けても、それだけでは決して平和で幸せな暮らしはやって来ない。それを実現させるためには、何よりも私たちが自分自身の「こころ」の平和を実現することが急務である。教化学の視線で「立正安国」の精神から「脱原発」を論じたい。キーワードは『立正安国論』「汝早く信仰の寸心を改めて、速かに実乗の一善に帰せよ。」である。

## 1 私の一人称について

はじめに、一人称の私について述べておきたい。なぜなら、教化学ばかりではなく、宗門内で布教教化活動を調査研究し、かつそれを論じようとする場合、その僧侶の生き方によって大きく視点が異なるからである。およそ僧侶の生き方に三つの立場が考えられる。こういうと多くの方は優等寺院の福寺と貧困山困窮寺のコントラストを思う方もあろうがそうではない。現代は経済社会であるから寺院といえども経済行為の上に成り立っているために、その経済

をどうマネージメントしているかで僧侶の考え方が違ってくる。

要するに本山などの福寺に勤務するサラリーマン僧侶か、檀家だけでは成り立たない信者寺の僧侶か、葬儀法要対応型の檀家寺の僧侶か、ということである。サラリーマン僧侶であれば、タイムカート押しさえすればそれ相應の給与が得られるため、およそその志向は勤務寺の檀信徒のニーズにおさまる。信者寺の僧侶であれば、社会のニーズに敏感でなければ寺の維持ができない。檀家寺の僧侶であれば、葬儀法要のニーズに応えようとするため檀家対応型の内向きの行動をとる。こう気づけば、宗政を担う方々が福寺の住職であれば、どのように宗門運動を展開しても檀家対応型、現状維持型にならざるを得ない。なぜなら、常にある一定の檀信徒の葬儀法要のニーズに応えるように生きてきたからである。

ここで教化学を論じようとする私の個人的な立場を明かしておきたい。まず若い時分は大本山清澄寺に勤務するサラリーマン僧侶であった。それから貧困山困窮寺の住職としてご信者対応型の運営をした。ちなみに、十年間でおよそ一千人と面談し二百五十人ほどの信徒をはぐくんだこともある。この信徒さんが一年間に一度ご祈祷に来寺すれば、二百五十×祈祷料でそれなりの収入になっていた。さらに現在は檀家百軒たらずだが、葬儀法要対応型の僧侶となった。つまり、私は経済的には貧しい僧侶だが、宗内の僧侶方のおおよそにまたがる立場が理解できるのである。

さらにもう一つ僧侶を理解するためにの切り口、それは僧侶になる動機である。ざっくりと分ければ、僧侶の家庭に育ったか、在家からこの世界に入ったかなどの出家の動機である。その動機は人それぞれだから私個人については、家庭的な要因が大きい。両親が共に蒲柳で、私が幼いことから病気がちだったことだ。実際に両親は共に五代半ば、私が三十五才、再行成満した年に他界している。そういう家庭に育った子供が、人生上の不条理を胸に秘めて仏教学を学んだことを切っ掛けに出家して僧侶になった。立正の大学院時代の二十五才という遅咲きで堀之内妙法寺に入林し、およそ四年間僧院生活を経験した。

どうも人生上の不条理によって仏教の大海に迷い込んだ者には、「行学の二道をはげみ候べし。行学たへ（絶）なば仏法はあるべからず。我もいたし人をも教化候へ。行学は信心よりをこるべく候。」（『諸法実相抄』「定本一卷 七二九頁」と、「智目行足よく清涼の池に到る」（智目行足到清涼池。「大正三十三 七一五b」との聖語が胸に響いた。そのため仏教とは行学そのもの、智慧の目で悟りの境涯をよく学び、修行の足で歩いて行けば、清涼の池にたどり着いて癒されるという仏教体験（一人称）を求めて修行畑を歩いてきた。

伝統教団の日蓮宗内でも、ご存じのように一貫して遠壽院行堂で研鑽を積み、五行皆伝後は請われて副伝師の分際として十年職責を全うした。さらに日本仏教は明治時代の廃仏毀釈後に行われた法改正、とくに宗教と医療の分離をはかる改正（明治七年「医療・服薬を妨害する禁厭・祈祷の取締を命令」）によって伝統教団でも修行法などの伝承ごとが、あるいは形骸化し、あるいは断絶している。また文献的な文言としては伝承していたとしても、その具体的な作法は使い古した櫛のように所々抜け落ちていく。それを埋め合わせるために二〇年前から、宗教的な伝統の息づくインドの山岳地域ヒマチャル地方のヨーガ行者に師事し、呼吸法や瞑想技術などを修学してきた。すなわち、私は先のような社会的な僧侶の立場と、仏教を行学の体験としてと捉えた「一人称」から語っているということである。

これから明らかになるが、とくに教化学を論じようとするとき、一人称の自覚が大切である。なぜなら、机上の空論ではなく布教教化の現場で悩んでいるその人自身の信仰が問われるからである。

## 2 教化学の視線の重要性

ここでいう教化学の視線とは何だろうか？。その根本はなんだろうか？。ここで重要なことは哲学的な思索や論理ではなく、それらを思惟する私自身の生き方である。それらを論ずる私たち自身の一人称（セルフ）が問われるのである。



〈インド・ベナレスのマニカルカル・ガート火葬場、茶毘に付される遺体〉

なぜなら、私たちの生き方は死に方そのものであり、私たちは生きてきたように死を迎えるからである（堀エリカ著「おだやかで幸せな死を迎えるための二十三の方法」新人物往来社刊 二〇一二年）。このように私の生死の全体を含めた生き方こそが、教化学の視線である。これは私が言うまでもなく、日蓮聖人が指南されたように「されば先ず臨終の事を習うて後に他事を習うべし。」（『妙法尼御前御返事』定本第二巻 一五三五頁）の通りである。

ところが、人はひとつある命題を与えられると、自らの考え方を二人称（彼）、三人称（彼等）に伝えるために命題を観念化する。これが仏教でいう煩惱（クレーシヤ）である。人には常に言語理性に則った思惟によって解説を試みる機能が備わっている。その二人称もしくは三人称を対象とする解説は論理的で筋が通っていても、それは観念的なことであって、生死の全体を含めた一人称の生き方へはフィードバックしない。これは誰も

が経験的に知っていることで、論理的に理解できても内面（内省）的に納得できないという事態に陥るからだ。たとえば、人は死を背負って生きていることは誰もが理解しているが、その実際について一人称の自分の死に折り合いがついているかどうかは別ものであるということである。

だからこそ「教化学」という場合、そこには自分自身の一人称が問われなければならないのである。現代宗教学研究所では「教化学は教学の現代化である」（日蓮宗現代宗教学研究所規定）第二条）という。それは教学（宗教の教義の理論と研究）『広辞苑』第五版）がある命題を言語理性に則り観念化するのに対して、教化学はその命題を祈りなどの信仰を通じて主体化する道程を明らかにする学問だからである（「教化学の意義と仏教臨床について」日蓮宗現代宗教学研究所刊『教化学研究』1 所収）。

たとえば、人間の社会的共同生活の構造や機能について研究する学問分野である社会学の先生方が「脱原発への提言」を語れば、それは大学という学問性の中で「脱原発はかくあるべき」と、理路整然と観念化してくれるはずである。しかし、そこで「脱原発」が観念化された瞬間、脱原発は私たちの身体（一人称）から離れて、観念化された言葉が一人歩きを始める。「放射能は危険だから即刻中止すべきだ！」「いや即撤廃は早急すぎる！」などなど、一人歩きをはじめた脱原発は水掛け論となる。これが現在の脱原発をめぐる現状である。それは「教学」という観念化の行為も同様である。だからこそ「教学の現代化」が教化学と呼ばれるのである。

### 3 教化学の眼差しから

この一人称の立場から「脱原発への提言」を語るには、その教化学の眼差しについて論じなければならない。なぜなら、私たちは一人称で生きていながら、同時に社会的な存在だからである。何ごと社会の事象と切り離して存在することはできない。それは仏教文化でも、どの宗派の教義でも同様である。さきには教化学は命題を観念化するこ

とはなく主体化する道程を明らかにする学問といったように、「教学の現代化」とは仏教文化（主体化の道程）を社会化することだと言い換えることができる。

すると教化学の眼差しとは、社会化する眼差しということになる。では社会化の眼差しとは何だろう。結論を急げば、それはスピリチュアリティの視線のことである。こういうと皆さんは、なんだ？ いかがわしい話か？ と思われるかもしれない。スピリチュアルな前世のお話で一世を風靡した江原啓之氏（えはら ひろゆき、一九六四年生まれ）や、美輪明宏氏（みわ あきひろ、一九三五年生まれ）を思い出す方もあるだろう。

しかし、このようなスピリチュアリティという言葉の用語は誤りで、学問的な規定が一応存在している。それは「私は救われた」という一人称の現実感であり、私たちの心身の状態だということである。さらに世界的にブームとなっているスピリチュアリティという言葉には、WHO（世界保健機構）のあることが大きく関与している。

それは一九九八年に世界の医師や医学会の元締めのようなWHO委員会が、「健康の定義」を新しく見直すよう提案したことに由来する。当時WHO事務総長は中嶋宏氏（在任期間一九八七～一九九八年）という日本人だった。その提案とは、これまでの「健康とは、単に疾病または虚弱でないばかりではなく、身体的、精神的および社会的に健全な状態（well being）である」という定義を、「健康とは、（中略）身体的、精神的、社会的および霊的（宗教的・spiritual）にダイナミックに健全な状態である」と改めようというものである。その翌年の一九九九年の総会では「事務総長のレビュー（評価）の下におく」として討議の議題から外されたが、この提案が世界に与えた衝撃はとても大きかった。これ以降、スピリチュアリティ（霊性）なる言葉は、あつという間に世界中を席卷した。このスピリチュアリティという言葉は、いままで宗教者が宗教の立場で用いていた言葉だったが、それを医療科学を標榜するWHOが討議したからである。

これによってスピリチュアリティがもはや非科学的な言葉ではなくなったと同時に、人は科学的な知識だけでは生

きられないということが分かったということである。それはスピリチュアリティを健康概念の中に入れなければ人間の存在はなり立たないことに気づき、人間を「肉体・精神・魂」の三つの全体として見るスピリチュアリティが受容された瞬間である。

過酷ない方だが、世界中のみんなが「元気に・豊かで・長生き」が幸せという社会目標はすでに実現不可能であり、一病息災に徹した生き方が求められているのである。「短かったがいい人生であった」というスピリチュアリティの気づきが求められている。ここにスピリチュアリティが出自の喜びと呼ばれる所以がある。

ところで、このWHOが提示した健康 (Health) という言葉を仏教用語のサンスクリット辞典であたると、「スヴァ・スタ」という単語が見つかる。「スヴァ」は私・そのものの意味、「スタ」は存在する・住するの意味である。スヴァ・スタとは自己に安住する、悩まされていない状態 (自己存在) ということだ。ちなみに、このスヴァ・スタは、漢文のお経文では有名な『妙法蓮華経』に、「安穩にして快き存在」(安穩快樂〔あんのんけらく〕)、また「もろもろの患〔うれい〕なき存在」(無復衆患〔むぶしゅうげん]) と翻訳されている (SIR MONIER-WILLIAMS, SANSKRIT-ENGLISH DICTIONARY, OXFORD, 1899, 鈴木学術財団『漢訳対照 梵和大辞典』講談社、一九八三年)。

じつは一九九八年にWHOが健康概念に「スピリチュアリティ」を考慮したとき、そこでは東洋的な価値観が受容された、仏教 (仏陀の教え、『妙法蓮華経』の教え) が受容された瞬間である。人は理性的な論理では救われないうこと、「元気に・豊かで・長生き」という物の充足から感性の充実が求められていること、宗教的な感性の充実が求められていることである。人は科学 (科学的な思考、解釈) だけでは幸せになれないということである。解釈とは二人称、三人称の世界のことで、それを理解しても現実は何も変わらない。大切なことはこの一人称の納得のことであり、スピリチュアリティは価値観の大転換である。

## 4 17の大転換の背景とメカニズム

このスピリチュアリティの気づきは重要なことで、それは宗教界や仏教界だけの話ではない。医療保険政策をはじめ精神医療政策や教育政策など政治行政においても同じである。それは現代社会の状況が物語っている。すでに社会保障も社会福祉も破綻寸前であり、その原因は物の豊かさを追及する資本主義の経済社会に限界が来ているためである。いま世界の先進各国はポスト福祉国家への道を確実に歩み続けている。さきのように世界中のみんなが「元気に・豊かで・長生き」が幸せという社会目標はすでに実現不可能で、一病息災に徹した生き方が求められている。

繰り返すがすでに物の豊かさを目指す時代に限界がきているのである。WHO（世界保健機構）が掲げた「すべての人々が可能な最高の健康水準に到達すること」（世界保健機関憲章第一条）などの理想は実現不可能なそれら言となつた。だからこそWHOの委員会が「健康の定義」を新しく見直し、そこに「スピリチュアリティ」を代替しようと提案したのである。

実際にいま世界的な規模の危機的な状況に陥っている。こういうと我々の中で『立正安国論』を持ち出し教義解釈を展開する方がいるが、ここではスピリチュアリティの視線が必要なのである。一人称の眼差しで社会的な事象を眺めることが必要なのである。いま世界全体の政治経済的な大変動によって人々の暮らし向きが危機的な状況に陥っているからである。世界人口はわずか三〇年ほどで倍増し、すでに七〇億人を超え人口パンデミックの様相を呈している（二〇一一年十月二十六日 国連人口基金「世界人口白書」）。それに加えて食糧生産すら追いついていない（生産量ではなく食料流通の問題も一因という主張もある）。この状況下で先進各国は国益を優先させるため「国家安全保障」を強化させつつある。世界的にいま医療や社会福祉に、お金をかけられないという社会経済的な危機がきているということである。

日本国内に目を向けてもその状況は同じで、政治経済的な危機は昨今の中国や韓国との領土問題、国防問題ではなく、国家財政の破綻である。たとえば、二〇一〇年度の一般会計予算は、収入（税収）三十七兆円に対して支出（歳出）九十二兆円である。収入と支出の帳尻は五十五兆円の赤字である。赤字分は埋蔵金十兆円と国債四十四兆円で補てんしている。二〇一一年度六月末時点で「国の借金」は九四三兆八〇九六億円であり、いまは一〇〇〇兆円を超えている。すでにお気づきのように社会保障も社会福祉も破綻寸前であり、それは物の豊かさを追及する資本主義の経済社会に限界が来ているためである。

さらに日本では物の豊かさを追い求める高ストレスによって、糖尿病、脂質異常症、高血圧・高尿酸血症などの生活習慣病（ストレス疾患）が蔓延し、現代人のおよそ一九〇〇万人が生活習慣病に罹り、その予備軍まで入れると五〇〇〇万人に及んでいる（厚生労働省平成二十三年国民健康・栄養調査結果）。とくにこのような疾患と肥満を複合する病態は医学的にメタボリック・シンドロームと総称され、ガン、脳血管疾患、心臓病の三大死因の主要因となり、医療保険を大きく圧迫するほど社会問題化している。もはや現代人の多くが病気ではないが健康ともいえない状況にあることは、すでに周知の事実である。

また二〇〇〇年夏に象徴的な出来事があった。ニューヨークの国連本部で開催された「ミレニアム世界平和サミット」でアナン事務総長（当時）に招かれたヴィパツサナー瞑想の立役者ゴエンカ氏は『世界平和の模索』というテーマに沿って講演し、「瞑想という宗教的な技術によって人々の心に平和を実現することが大切である」と述べた。仏教を瞑想技術として扱うことで、平和会議に政治的な思想信条を持ち込まないよう配慮したのである。

アナン氏はこの会議にチベット仏教の指導者たちが欠席した理由を問われたとき、「宗教間の対立の問題は、聖書やトーラー、コーランによるものではありません。問題は信仰ではありません。問題は信仰者のあり方であり、お互いがどのような態度をとるかということです。」と、宗教を思想信条として扱うことなく、信仰者の「おこない」を

重要視して発言した。社会的にはダライ・ラマ法王が仏教界を代表して講演すると思っていたが、アナン氏は思想的対立を避け、仏教（宗教）をスピリチュアリティの視線から瞑想技術として提言するゴエンカ氏を選択した。これ以降、仏教は瞑想技術として扱われることが多くなっている。

そればかりではなく、瞑想技術としての仏教はテラワダのヴィツパサナー瞑想を中心に、インドからのヨーガ療法（医療効果を目的とするヨーガ）とあいまって世界的なブームになっている。チベット仏教も思想信条より、マントラ・チャンティング（誦経など）という瞑想技術として扱われている。アメリカの仏教に好意を抱く人（仏教シンパ）は、総人口の約一割の三〇〇〇万人におよび、仏教を宗派としてではなく瞑想技術と見ている。ちなみに、アメリカ仏教で何を実践しているかと問えば、「禅メディテーションとヨーガ」とか、「チベット仏教のチャンティングとヴィツパサナー瞑想」と答える。そもそも世界的な傾向として、宗教の教義的な主張は、宗教エゴと見なされる場合が多く、一九八四年にバチカンのパウロ二世が「宗教間対話」を打ち出したのもそのためである。宗教界の世界的な傾向として、これまでのように宗教を思想信条によって追求する方向から、仏教を瞑想技術として扱い現実的なスピリチュアリティの体験が求められている。

このように大転換の背景には、世界的な経済社会の行き詰まり、思想信条に対する閉塞感などなど、二人称の三人称の世界で如何様に解釈し理解しても現実は何も変わらないという大きな挫折がある。大切なことはこの一人称の納得のことであり、スピリチュアリティという価値観の大転換である。

ご存じのように、仏教には哲学的な議論は救いにならないという有名な「毒矢のたとえ」（中部経典六三）がある。この世のあり方について、哲学的に納得しないうちは修行に励もうとしない青年に、お釈迦さまが説いたものである。「ある時、人が毒矢に射られたとする。しかし、その人が、駆けつけた医者に対して、『この矢を射ったのはいったい誰か、その弓はどのようなものか、弦（つる）はなんでできているのか、などが分からないうちは矢を抜きたくない

い』といったなら、その人はそれが分かる前に死んでしまう。必要なことは、まず毒矢を抜き、応急の手当をすることであるということである。

## 5 教化学の眼差しとは「スピリチュアリティの視線」である

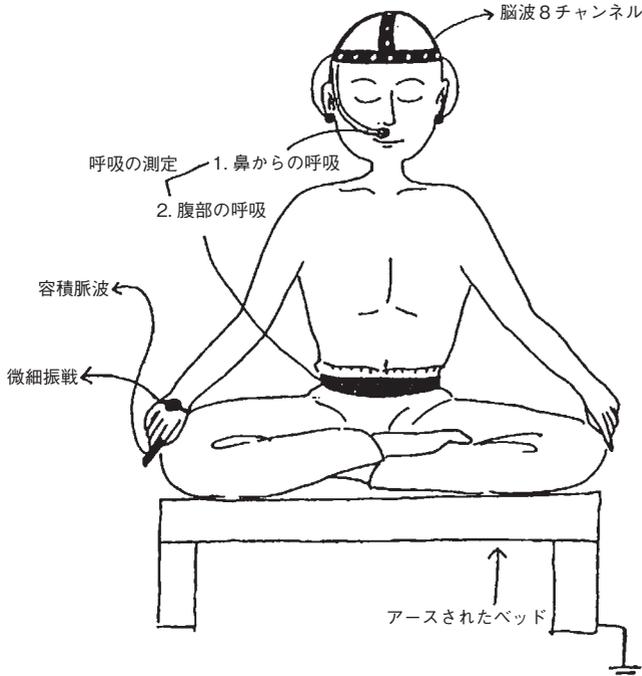
これまでを整理すれば、すなわち、社会通念として人は理性的に思考することを是とするが、仏教ではこれを教義や哲学の世界のことであり、観念の産物だとして否定する。つまり、理性的に理解していても、それは観念だから実際のことは別物、理解しても納得できる、受容できるかどうかは別物だということである。たとえば、人は誰でも自分は死ぬ存在であると知っているが、その自分の死に折り合いがつかないかどうかは別ものだとということである。

なぜなら、人の現存在は「理性的な思考」ではなく、切れば血の出る肉体上（感覚）に存在する痛いとか、痒いとか、快・不快という感性の世界に存在するからだ。これが一人称の私である。思考とは事物の観念化のことだから、理性的に理解しても実際には身体性を持たないために、そのときの快不快の感覚を受容できるかどうかは分からないからである。この感性の世界こそが人の現存在である。これが日蓮聖人が『観心本尊鈔』でいう「今本時の娑婆世界」のことである（定本第一巻 七二二頁）。

私たちは「生きていきたいが、やがて死ぬ存在である」ということを知っている。しかし、この現実が哲学的な思惟によって納得できるのであれば、仏教という宗教は必要ないはずである。この生死の現実を納得するためには、生死の現実を受容するにはスピリチュアリティの体験が必要である。それは観念化（分別）を離れた一人称（無分別）の体験である。その無分別の体験には、感性のコントロール、欲望のコントロールが求められる。スピリチュアリティの視線とは、この感性の世界を見せる視線、一人称の私を納得させる視線、出自の視線のことである。

## ○お題目を唱えて「不貪五欲樂」を具体化できるか

ある命題を理解しても現実は何も変わらない。そこには現実を転換する技術、スピリチュアリティを体験する技術が必要である。まさに一人称の私のあり方が問われるのである。それは『法華経』『不貪五欲樂』のことである。キワードの『立正安国論』『汝早く信仰の寸心を改めて、速かに実乗の一善に帰せよ。』である。その技術が『法華

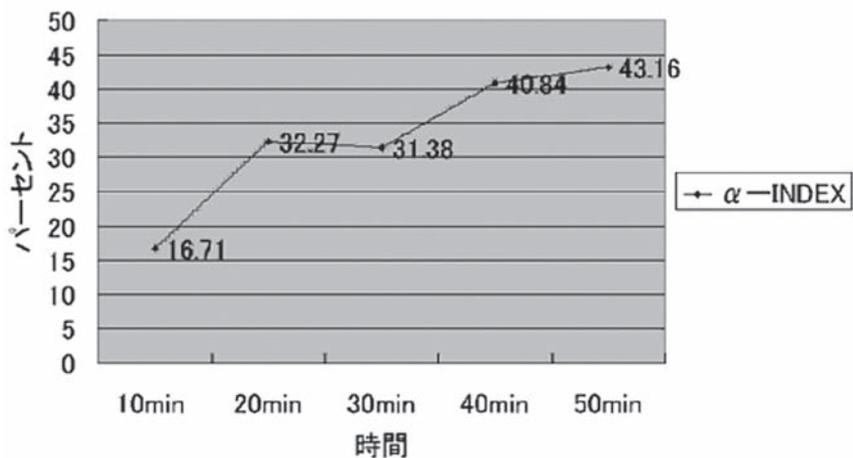


〈測定器具装着イメージ図〉

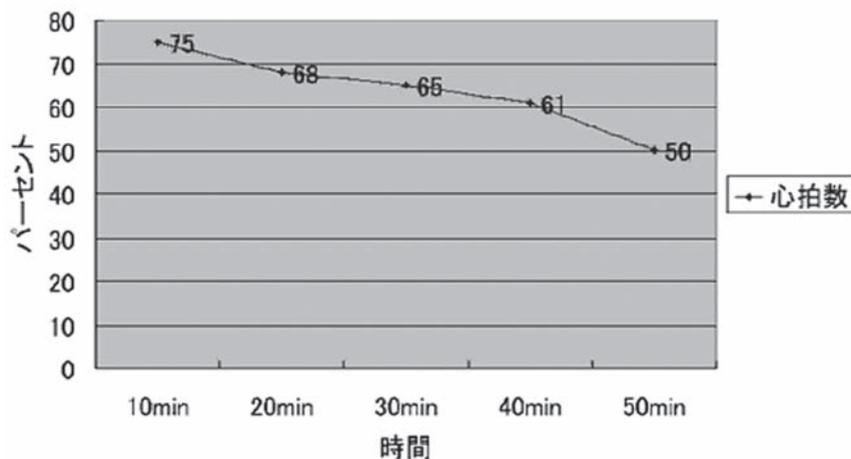
経』の受持唱題である（観心とは我が忘を観じて十方界を見る「定本第一巻 七〇四頁」）。実際に観心によって「不貪五欲樂」を超えられる。唱題によって身体の生理と心理が安定し、欲望をコントロールできることが分かっている（「修行と情動制御―瞑想技術の体系化に向けて―」『仏教心理学会誌』第三号所収 日本仏教心理学会発行 二〇一二年六月）。

実際にお題目を真剣に唱えているとき、「着装図」のように脳波計や心拍計を着装して測定すると、脳波は安定した $\alpha$ 波インデックスを提供し（グラフ3）、心拍数は平均値より徐波化し安定する（グラフ4）。これは一人称の私に変化するとの特徴である。このような修行を毎日繰り返す

唱題行実習時の $\alpha$ -INDEX「グラフ3」



唱題行実習時の心拍数「グラフ4」



て、心身が安定する状態を実現していると、その修行によって信仰者の生理的、心理的は安定した状態を維持するようになる。少欲知足に適う心身の状態が実現するからである。これが一人称の私の変化である。まさに観心によって「不貪五欲樂」が超えられるのである。ここに『立正安国論』「汝早く信仰の寸心を改めて、速かに実乗の一善に帰せよ。」が見えるのである。

私たちは『立正安国論』を行わずに（一人称で読まずに）、教義として解釈するために観念化させてしまうのである。この観念化によって論理的に理解できても内面（内省）的に納得できないという事態に陥るのである。

### ○脱原発のキーワードは「信仰の寸心を改める」である。

ながながと述べたが、教化学の眼差し（スピリチュアリティの視線）から、論題である「この世を浄土に―脱原発への提言―」を要約すれば、そのキーワードは「信仰の寸心を改める」である。

脱原発を訴えながら、この欲望社会の現実気づくことが「スピリチュアリティの視線」である。原発も我々の欲望の産物であり、便利な文化生活を謳歌したいという煩惱である。

だから「信仰の寸心を改める」というスローガンを掲げても、この欲望のコントロールができなければ脱原発はできない。まさに「不貪五欲樂」が大切である。「信仰の寸心を改める」ことは、『法華経』を信ずるというスローガンではなく、それは欲望をコントロールすることだ。お題目を唱えて、省エネの生活を実践することができるかどうかである。

『観心本尊抄』には「設ひ諸経の中に、処処に六道並びに四聖を載すと雖も、法華経並びに天台大師所述の摩訶止観等の明鏡を見ざれば、自具の十界、百界千如、一念三千を知らざるなり。」（設諸経之中所々雖載六道並四聖 不見法華経並天台大師所述摩訶止観等明鏡。不知自具十界百界千如一念三千也。〔定本第一卷 七〇四頁〕と、お経文の

中に、あなたは菩薩さまだ、仏様だと書いてあっても、法華経の明鏡に自分の姿を写し見なければ、それは一念三千を知らないことだとある。

こう捉えると日蓮聖人のスピリチュアリティは一目瞭然である。日蓮聖人は「こころ」のあり方を改めること、信心を養って「こころ」をコントロールする以外に、この世を浄土にすることはできないという。「信仰の寸心を改める」とは信仰心に目覚めることがすべての要であるという。皆でお題目を唱えて、私たちの一人一人、「こころ」の浄土に気づくこと、まさに「脱原発は信心を養うことから始まる」のである。

お題目を唱える人が、自分の欲望をコントロールして、節電、省エネ生活ができるかどうか問われているのである。